

報告

持続と変容の諸相

—— 四つの集落の聞き書きから (2) ——

橘 川 俊 忠

KITSUKAWA Toshitada

本稿は、当センター第一期個別共同研究「持続と変容の実態の研究——対馬60年を事例として」で実施した現地調査の報告である。報告の一部はすでに前年度『年報』第7号に「持続と変容の諸相——四つの集落の聞き書きから(1)」として発表した。筆者の事情により報告の執筆が遅れたため、「調査報告」として(2)からはじまるという変則的な形になったが、これは、年報全体の編集方針に合わせて形式を変更したためであることをお断りしておきたい。

Ⅱ 神社と共に生きた村・木坂にて

① 概況

上対馬島の西海岸、対馬上下両島ということで見れば真ん中ほどの外海に面した小さな谷間に峰町木坂の集落はある。南北を標高百数十メートルほどの山に挟まれ、小さな流れに沿って北側の山裾に住居が並び、南側のわずかばかりの平地に田畑や小屋がある30戸ほどの小さな集落である(写真1)。30戸ほどといっても、実際に居住している世帯数は、ずっと少ないが。木坂の地内は、集落の北側にある尾根筋を越えた、集落のある谷間より広い平地を持つ谷間も含んでおり、周囲の山地も含めると集落の規模の割には広い面積を持っているように思われる。しかし、こちらの谷間には、人家はほとんどない。谷の奥には田や畑があり、2戸ほど人家もあるが、海岸近くの平地は、現在は石造りの藻小屋が復元されている公園や駐車場になっており、田畑は作られていない。何年か前に、台風による高波で藻小屋などが流され、その被害からの復興のため海神神社の前から海岸に続く土地を町が買い上げ、公園として整備し始めたとのことであった。

その海神神社は、対馬一之宮という由緒ある神社で、集落北側の集落とは反対側の山腹にある。神社の前の浜を御前浜と呼ぶが、その浜から100メートルほ

ど入ったところに大きな鳥居があり、そこから境内になっているが、本殿はさらに、かなり広い石段を標高差にして100メートルほど登った山腹にある。今は訪れる人も少なく、静寂が支配するその境内は、よく清掃されており、氏子の人々の厚い信仰心が伝わってくる(写真2)。しかし、その氏子も、かつて峰町全集落であったものが、今では木坂とそれに隣接する青海、狩尾の3集落になってしまったという。

さて、集落の内部だが、隣の集落である狩尾から峠越えに入ってきてまず目につくのが、廃校となった小学校である(写真3)。窓は破れ、壁は何か所も崩落し、蔦がはった2階建ての校舎、かつての校庭の片隅には、創立100周年の記念碑が、手入れされないまま生い茂った木立に埋もれるように立っている。小学校は、地域にとって単なる子供のための教育施設にはとどまらない意味を持っていた。運動会や学芸会などの学校行事は、地域の年中行事として根付いていた。特に、小さな集落であればあるほど地域との密着性は強かったといってもよい。その学校が、無残な姿をさらしているのは、なんとも寂寥の感を誘うが、破れてもなお、取り壊しもせずに建物を残しているところに、集落の人々の思いがあるのかもしれないと思われた。

さらに海岸に向かって集落の中を進んでいくと、廃屋や明らかな空き家が目立つ。60年前、宮本常一

は、集落の全世帯主 31 人の氏名を記録していたので、それをもとに聞き取りをしたところ、現在、木坂に居住しているのは 17 戸、そのうち多くが高齢化した夫婦ないし独居世帯、子供のいる世帯はわずかで、学齢児童はゼロ、小学校が廃校になるのもやむをえないという状況であった。

『峰町誌』によれば、人口は、戦後の最高は昭和 35 年の 235 人（戦前最高を数えたのは大正 2 年の 286 人であったというからそれよりも少ない）であったが、その後減少を続け、平成 2 年には 93 人になった。この減少の仕方は、峰町の中でも最も急激なものであったという。それからすでに 20 年、人口はさらに減少し、高齢化も進んでいる。集落としての危機は、極めて深刻であるといわざるをえない。

お話を聞かせていただいた荒木幸美氏は当時 78 歳、集落で唯一の商店を営み、集落の伝統を伝えることに今でも情熱をお持ちの方であった。以下、氏のお話をもとに木坂の 60 年を振り返ってみたい。

② 漁業

現在、木坂集落の海岸には、水揚げ用の設備や冷凍庫などの港湾施設は見られないが、防波堤と消波ブロックに囲われた漁港が作られている。宮本常一が残した写真には、海岸に引き上げられた地引網用と思われる木造和船が写っているが、防波堤は写っていないので、それらの施設は、宮本の調査後に作られたものに間違いない。その漁港にわれわれが訪れた時には、係留されているのは、船外機付きの小型漁船が 2、3 艘で、漁業専門者のいる港には見えなかった。

たしかに、木坂は地形からしても大きな漁業が成立するような条件には恵まれていないように見える。また土地、農業とのつながりの強かった「本戸」が大部分を占めた集落として海や漁業への依存は強くなかったといえるかもしれない。しかし、かつてはここにもそれなりの漁業はあった。磯漁が中心で、その中でも主なものは、1 つは採藻漁であり、もう 1 つは地引網漁であった。

採藻は、主に農地の肥料とするための藻の採取であったが、それが盛んであったことは、御前浜の海岸に立ち並んだ藻小屋の数が物語っていた。かつては、藻

小屋は、船小屋とともに木坂のほぼ全戸が所有していたという。現在は、観光用に復元された 4、5 棟の藻小屋が往時をしのばせるだけだが、石造りの壁に屋根をかぶせたそれは、それぞれ 30 平米を越えるほどの広さを持ち、かなり大量の藻を貯蔵できる規模のものである。藻は、採取といっても船で海中から刈り取るのではなく、海岸に打ち上げられたものを拾い集めるという形で行われた。春先の時化の後などには、御前浜に大量に打ち上げられたという。集落中から人が出て、広い集め、干してから配分し、各家の藻小屋に収蔵した。その配分の仕方は、干した藻を 30 ほどの山に分け、番号を付け、浜の石に番号を書いたものを各自が取り、番号のあった山を取得するという方法で行ったという。いわば、くじによる配分であるが、それは集落内の平等を確保する方法でもあった。

その採藻も、藻小屋も無くなったように今ではまったく行わなくなった。藻は、畑の肥料として使われ、特に麦作には最適な肥料であったというが、麦作が行われなくなり、その必要性が低下するとともに、より取り扱いが簡便な化学肥料の使用が増加したことが、その一因であった。また、海の中の変化、すなわち「磯焼け」といわれるような海藻の生育不良ないし不毛化によって、打ち上げられる海藻自体の減少がそれに追い打ちをかけたようである。

肥料用の藻の採取のほかに、ヒジキや若布、フノリ、アオサなどの換金できる海藻の採取も行われていた。特にヒジキは、多い時には乾燥したもので 1 トンを超える収穫があり、相当な現金収入になったという。これも、最近では磯枯れの影響がまったく採れなくなってしまったらしい。

次に、地引網であるが、これには 2 種類あった。イワシなどを獲る小型の地引網とブリなどを狙うオリコ網と呼ばれる大型のものの 2 種類である。前者は、海岸から直接網を引き回し、引っ張り上げるもので、網も船も比較的小型のもので済み、人手も比較的小さな地引網であった。これは、昭和 25、6 年頃までが最盛期で、その後は止んだ。後者は、まず、オリコ（ブリ棒ともいい、木製の棒を白く塗ったもの）と呼ばれる木製の浮を長い綱に幾つも付け、それを沖合に引き回し、狙った魚を岸近くに追い込み、追い込んだ

ところでさらに捕獲用の網を引き回し、陸から引き上げることによって漁獲を得るというより大型の地引網である。これも相当の漁獲があったが、昭和35、6年頃までで、その後は行われなくなった。

荒木氏によれば、磯が荒れたのは西海岸に目立ち、東海岸ではそれほどでもないという。また、東海岸では、大型のイカ釣り船による外洋での操業も盛んで、西海岸地域から、イカ釣り船の乗組員やイカの加工場の働き手として出かけたものだという。荒木氏も、若いころイカ釣り船の乗組員として活躍していたと懐かしそうに語っておられた。それも、近年のイカの不漁によって操業縮小に追い込まれているようである。

漁業の衰退は、対馬全体にとっても大問題であるが、木坂ではその影響はあまりにも甚大であったといってもよいであろう。

③ 海神神社との関係

海神神社は、近世以前には上津八幡宮と称していたが、明治4年に国幣中社に列せられ海神神社と改称された（海神神社の由緒などについては『峰町誌』の該当項目参照）。この神社と木坂集落との関係については、宮本常一の『私の日本地図⑮ 壱岐・対馬紀行』（未来社）には、「木坂の村は三二戸から成っている。木坂八幡に奉仕していた家を中心になってできた村で、神社とは山をへだてた南の谷に、海岸から奥へ谷の中を一本の道が通り、その道の北側に南面して家々がならんでいる。神社に奉仕した家でもっとも身分の高いのは伊豆宮司家、いま鳥居姓を名乗っている。次に輪番宮司、その下に社人がある。」と書かれている。記述の仕方からすると、宮本が調査に訪れた昭和25年当時の現状の記述とは思われないが、今回の荒木氏からの聞き取りでは、そうした祭司組織については確認できなかった。荒木氏によれば、木坂には本土から来た神主が居住していたが、その神主も現在は本土に引き揚げってしまったという。神主がいた当時は、集落の住人が清掃や祭礼用の供物の供給などを担当し神社に奉仕していた。また、旧暦8月5日の例大祭等の際には、島内各地からの参拝客のために、集落の各家で宿を提供し、その時には村の人口は3倍ほどにも膨れ上がったという。

例大祭は、今でも行われており、8月4日の宵宮では境内に舞台を設け、歌手を呼んだり、それなりに盛大らしいが、自動車の普及などによって日帰りが可能になり、集落で宿を提供することもなくなった。常駐する神主がいなくなり、氏子の減少などもあって、神社との関係も希薄になりつつある印象であった。

④ 年中行事

木坂の年中行事の中心は、ヤクマと盆踊りであった。

ヤクマとは、毎年6月の初午の日に行われる行事で、関東であれ、関西であれ、九州であれ、村を出ていった二男、三男以下の男達の、無病息災と仕事の成功を祈願することを第一とした村を挙げての行事であるという。その日、その年のうちに島外へ出た者のいる家では、手作りの甘酒、クサビ（ペラ的一种）を焼いて串に刺したもの、小麦の団子を用意し、今では海神神社の末社の1つに祭ってある天道様（かつては海神神社の参道の途中にあったという）に供え、宮司に祝詞をあげてもらう。

その間村人は、御前浜で、石をピラミッド状に2つ2メートルほどに積み上げ、竹につけた御幣をさし、神の依り代とする（写真4）。これは毎年新しく積みなおすという。そして、その前で村人全員が横一列に並んで、区長の号令で一斉に拝む。その時、村を出てよそで働く者たちのために拝む。合わせて五穀豊穡も祈る。そして、今は海岸にできている休憩施設に引き揚げて、お供えした甘酒、クサビ、小麦の団子をみなで食べる。「今では、甘酒、クサビ、団子は形だけで、ビールや焼酎、買ってきたおつまみなどに変わってきてはいますが、いろいろ行事が消えていく中で、このヤクマだけは続けていこうということで頑張っています」と語った荒木氏の思いは、よく理解できた。

このヤクマ行事は、文化庁によって、平成23年度の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に青海のヤクマ行事と共に指定された。そのこと自体は、民俗行事としての価値が認められたという意味で喜ぶべきことかもしれないが、「記録作成等の措置」が必要もないほど安定して行事が維持できる状態が続くことの方が望ましいことに違いない。

それはそれとして、文化庁の指定の理由について、十分な検討がなされた上でのものかどうか若干の疑問が残る。『月刊 文化財』（平成24年 No.582）に掲載されている「新選択の文化財 記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財」によれば、「木坂・青海のヤクマは、海岸にヤクマの塔と称する円錐形の石積をつくり、供物を供え、子どもの無事成長や家内安全、五穀豊穡などを祈願する行事で」あるとされている。ここには、荒木氏のいうような「島外に出た二男、三男の無病息災と仕事の成功を祈る」という行事の目的はない。それは、文化庁のいう目的がもともとのものであり、荒木氏のいう目的は島から人々が出ていくようになってから変化したものであるかもしれない。しかし、変化したものなら変化したものとしてその行事の意味を考えることが必要であろう。

次に盆踊りについてであるが、これは残念ながら現在は廃絶してしまった。宮本が木坂を訪れた第一の目的は、この盆踊りを調査することであった。実際、宮本の前記の調査ノートには、その時の記録がかなり詳しく記されている。荒木氏もその宮本の調査の際には、わざわざ村中で盆踊りを演じたこと、宮本が映画や写真などの映像記録を作成していたことなどをはっきりと記憶しておられた。しかし、残念ながら、この時の映像記録はその所在を確認することはできなかった。

盆踊り自体については、前記宮本の調査ノートや民俗学研究者による研究があるので、ここでは荒木氏の話に基づき廃絶に至った経過だけを追っておこう。

本来、木坂の盆踊りは、本戸の長男が演じるもので、踊り手、囃し方合わせて13人で構成されていた。女性や16歳以下の男子は参加できないのが原則であった。宮本が訪れた当時は、完全な形で演ずることができたという。しかし、人口が減少し、高齢化が進んで、次第に本来の形式を守るのが困難になり、年齢や性の制限もはずされ、昭和50年代には、男女を問わず小学生でも踊りや囃し、唄などを伝承させようとした。こうした努力の甲斐なく、現在では完全に廃絶してしまった。

荒木氏は、この盆踊りの優れた伝承者で、踊り、囃し、唄すべてをこなせたという。話の途中で、盆踊り

唄を披露していただいたが、その声はろうろうとし、盆踊りの継承のために力を尽くされた心が伝わってきた。

木坂は、歴史の古い集落であるため、多くの民俗行事や習俗が残っていた。宮本の調査ノートから拾い上げると、つぎのような行事があったという。その現在の実施状況と合わせて、以下に略記しておく。月日は基本的に旧暦である。

1月1日から3日までは正月で、各家でワカミズクミ、ゾウニ、クラビラキなどを行うが、基本的に家ごとの行事であり、現在でもやっているところが多い。

4日には、オオトシの残りごはんをいれた粥を食べたり、7日には、朝ゼンザイを作って食べたりしたが、今ではやっているところは少なくなった。

7日は、なぬか正月、10日は、10日エビス、11日は、伊勢講があったが、いまは講で集まることはなくなった。

14日はコッパラ正月といった。コッパラとは、タラの木の枝の皮をむき、湿らせた細い紙を螺旋状に巻きつけて松の木の松明でいぶして、螺旋状の模様をつけたもののことで、子どもがそれで遊んだという。おなじものは、鰐浦でも作ったというが、鰐浦では、それをナレナレトongoと呼んでいた。

15日は八幡講があったが、これも集まることはなくなった。また、この日はモドリ正月といい、カズノコジルを作って食べるという風習があるという。カズノコジルとは、たくさんの種類の具をいれることから名付けられた汁のことで、フジツボとミナという貝を入れ、昆布、和布、大根、人参、ごぼう、豆腐など、とにかく具沢山にした汁で、荒木氏のお宅では今でも作っているとのことであった。

1月には、以上のほか、20日正月、二十三夜様など、各家で行う行事や、28日のハルナグサミなどの行事があったが、今ではあまりやられていないという。

2月は彼岸で、ダンゴをこしらえたりしたが、現在は新暦にしたがって一般的なお彼岸と変わらない。

3月3日は、花見をした。子供が、重箱を持って山に登り、桜の花を見ながら遊ぶというようなことであ

ったが、現在は新暦の3月3日に世間一般の節句と変わらなくなっている。この他に、21日にはショマツリというものがあったと宮本は書いているが、現在は不明である。

5月は23日にオツキマチをした。

6月は、初午の日にヤクマをした。これは現在でも集落全体の行事として続けている。15日には、祇園祭があって、小麦の餅を作ったりしたが、現在ではしなくなった。

7月は、お盆の月で、13日から16日まで、盆踊りを中心にして集落全体で行事があったが、現在は前述のように実施できなくなった。また、この期間には、それぞれの家でチマキやダンゴを作って先祖に供えたり、トコロテンやソーメンを食べたりという習慣があったが、それがどうなっているかは確かめられなかった。

8月は、海神神社の祭りが中心となる。4日が宵宮、5日が大祭。宮本の調査ノートによれば、ミコノマイ、ホコノマイ、ミコシ、フナゴロ、ハヤウマトバセなど、をしたとあるが、今回の調査では祭りを見学することができなかったのもので、どの程度の行事が残っているのか確認できなかったが、すでに述べたように氏子の減少などのため、かなり行われなくなっているのではないと思われる。

また、8月6日には、サイコンシャマツリという先祖を祭る行事が行われている。サイコンシャは、タマヤともいい、先祖の位牌を祭る堂舎で、海神神社の境内にある。木坂は、現在でも神式の葬祭を行っており、墓地も集落を挟んで神社とは反対側の山裾に設けられている。

15日は、いわゆる十五夜で、芋を供えるという。

9月は9日にクニチノクリメシといって栗飯を炊いて食べる習慣があったが、今はほとんどしなくなった。13日はマメメイゲツといい、月に大豆を枝つきのまま供えた。かつては若者が供えた物を盗み、盗まれた方はそれを見て見ぬふりをするという風習があったらしい。宮本が来た当時には、すでに子供がやるようになっていたというが、現在はそれをしようにも子供がいなくなってしまうと、記憶だけが残っているという状態である。

10月には、イノコがあったが、これもイノコグミに入るべき子供がいなくなったため止んでしまった。

11月は、ゲンブク・カネツクと成人に関する行事があったが、これも同様に行われなくなった。ただ、これは全国的に成人式が1月に行われるようになったためにそれに取って代わられ、行事の内容も変化していったと考えられる。

12月に入ると、正月を迎えるための行事が続く。13日はショウガツハジメといい、家ごとに異なる仕方だったようであるが、この日から正月の準備に入ったようである。28日はモチツキをし、30日はオオトシで、ソバを食べる習慣であった。この習慣は、全国的な行事と同じように各家で行われているという。

12月20日には、対馬独特の風習として、ハテハツカと称してソーメンを食べたという。これは、旧藩時代、この日が刑罰の執行の日でゴクモンサラシといって死刑が行われることがあり、イノチナガソーメンということでソーメンを食べたそうである。いつ頃までそうということが行われていたかは分らないが、伝承は今に残されている。

以上、宮本の調査ノートによりつつ、木坂における年中行事などの変遷を見てきたが、宮本のノートも心覚え程度のものであり、今回の調査も十分ではないため、残念ながら消えていった時期などを明確にすることはできなかった。確実に言えることは、昭和40年前後の時期から、人口の減少、とくに若者・子供の減少が続き、それが様々な行事の消滅に拍車をかけたことである。また、旧暦から新暦への移行、マスコミや人の往来の活発化などによって全国的な行事のやり方が浸透し、地域独自の行事の減少、変形をもたらしたことも間違いない。

ただ、木坂の人々は、集落の存続とまとまりを維持するために、ヤクマだけはなんとかして維持しようという強い熱意を持っていることは特筆してよいであろう。そして、ヤクマの目的が、家内安全・五穀豊穡を祈願することよりも、島外に出ていった集落出身者の健康・繁栄を祈願することによって変わっていったとするならば、その心情の痛切さには胸を打たれるものがある。文化庁によってこの行事の記録作成・保存の努力

がされることになったようであるが、行事そのものが
継続できるようになることを願わずにはいられない。

（今回も筆者の怠慢により、廻，豆酛については次

号に回さざるを得なかった。記してお詫びした
い。）



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4